

活動報告書

報告者氏名：山川米子 所属：北谷町立北谷中学校 記録日：2013年2月28日

【対象生徒の情報】

・学年

中学2年生：男子生徒1名

・障害名

軽度の知的障害

・障害と困難の内容

身辺自立は確立しており、言葉による指示も理解でき、会話も問題ない。しかし、読み書きや計算の能力は小学校低学年程度である。

【活動目的】

・当初のねらい

軽度の知的な遅れから、小学校低学年程度の読み書き能力である対象生徒は、協力学級において取り組む授業で、いつも控え目な態度で臨んでいる。そこで、iPadを活用することで、協力学級においても活動的に授業に臨むことができるのではないかとすることを目的とした。

また、学年行事として修学旅行が控えており、行程には京都の自由行動がある。京都についての学習や、乗り物の利用法、道順等、端末機器を使用することで、擬似的体験をさせることも目的の一つである。

・実施期間

平成24年5月から平成25年3月まで、総合的な学習の時間や教科、生活単元学習の時間において使用。

・実施者

山川米子（特別支援学級担任・特別支援教育士）

・実施者と対象生徒の関係

生徒の在籍する特別支援学級担任

【活動内容と対象生徒の変化】

・対象生徒の事前の状況

明るい性格で、支援学級及び通常学級にも多くの友人がいて、休み時間等はおしゃべりをしたり、ふざけ合ったりして笑顔で過ごしている。しかし、授業になると自信のなさから消極的な態度であり、特に協力学級においては、発言もなくおとなしく過ごしている。

・活動の具体的内容

iPad のムービー機能で、ダンスや手話を録画し練習に取り組んだ。また、漢字の読み書きがスムーズに行えるよう大辞林の活用に慣れさせた。その他、総合的な学習の時間においては、修学旅行の取り組みとして、京都の地理をマップや Google Earth で確認したり、移動の所要時間を調べたり、建物の中を覗いたりした。そして、修学旅行中の写真を Keynote でまとめ、協力学級の全生徒の前で発表した。

・対象生徒の事後の変化

iPad の活用により、支援学級における授業では積極的に取り組むようになった。また、協力学級の授業の中での大きな変化はないものの、発表時に学級の全生徒から大きな拍手をもらったことが自信に繋がった。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

対象生徒にとって、iPad のムービー機能は、録画をはじめ停止や繰り返し等の操作が楽に行え、また、教室には 50 インチの大型テレビもあったことから、ダンスを覚えるのに適していたようだ。去年は全校生徒でダンスを踊る際、その場をごまかしていたが、今年は全校生徒と一緒に踊ることができた。

また、言葉での説明や図及び写真等では、理解しにくかった修学旅行の取り組みが、iPad を活用することで、視覚的に分かりやすかったようで、授業の中で iPad を活用する時間が増えた。そして、Keynote によるまとめのプレゼンテーション作成においては、文字のフォントやスタイル、色を工夫したり、様々なアニメーションを設定したりと、これまでの中で一番集中して取り組んでいた。

それから、特に読めない漢字や、書けない漢字を調べるのに大辞林が大活躍した。普段は、辞書を引くのを面倒臭がり、平仮名で書いていた漢字を、自ら大辞林を活用して漢字で書くようになった。

・エビデンス

表 1 に、対象生徒の漢字の読み方や、書きたい漢字を辞書で探す場合と大辞林のアプリを活用し探す場合の所要時間を表した。国語辞典を活用した場合は、一つの単語を調べるのに平均約 70 秒かかったが、大辞林のアプリだと平均約 15 秒であった。また、読めない漢字を漢字辞典で探すと、平均約 90 秒かかったが、大辞林のアプリを活用すると平均約 43 秒であった。書き方が雑であったり、書き順が正しくない場合に、探したい漢字が出てこなくて、時間がかかってしまうことが課題である。

更に、授業で配布された観光用の地図で観光地を探す際、自力だと平均約 110 秒の時間を要したのだが、iPad マップだと観光地名を打ち込み、検索を待っても平均 20 秒程度であった。

表 1 漢字の読み書きや地図の位置調べ所要時間

資 料	所要時間		アプリ	所要時間
国語辞典	平均 70 秒	➔	大 辞 林	平均 15 秒
漢字辞典	平均 90 秒		〃	平均 43 秒
地 図	平均 110 秒		マ ッ プ	平均 20 秒

・その他のエピソード

対象生徒は、これまで自ら行動に移した学習、例えば辞書を取り出し漢字を調べたり、次の課題を要求すること等は少なかった。しかし、最近では、自ら読めない漢字や書けない漢字を大辞林のアプリで検索したり、自分にあった算数アプリを検索してみたり、または、iPad だけではなく、プリントを要求してきたりと学習に対して積極的な姿勢が見られるようになった。こうしたことから、最初 iPad に対して、興味関心の方が高かったが、実際活用していくうちに、必要性へと変化していることが伺える。

また、Keynote による修学旅行のプレゼンテーションを、協力学級の生徒約 40 名の前で照れながらも発表した。終了時に大きな拍手をもらったことが達成感に繋がったようで、その日の日誌に「発表ははずかしかったけど、とてもうれしかった」と書いていた。Keynote の操作により、修学旅行の出来事を順序立ててまとめ(※写真 1)、発表(※写真 2)したことで、対象生徒の体験したことや思いが協力学級の生徒に伝わり拍手として現れたと思うと、大げさかも知れないが、この発表は対象生徒と協力学級の生徒にとってのコミュニケーションの一助となったと捉えられる。そして、知的な遅れがあっても、携帯情報端末を活用することにより、通常学級に在籍する生徒と同様なことができるということも実証されたのではないか。今回の取り組みで、対象生徒は iPad の魅力を知り、現在保護者に購入を求めているほどだ。

次年度は、3 年生に進級し中学校最後の年である。更に対象生徒が充実した学校生活を送れるよういろいろな支援法を探っていきたい。



写真 1 Keynote の活用



写真 2 協力学級での発表風景